

第1期 国分寺市公民館運営審議会 平成28年度第11回定例会 要点記録

日時 平成28年5月17日(火) 午後2時～4時

場所 国分寺市立本多公民館 講座室

出席者

委員 佐藤委員長・田中(英)副委員長・門委員・長谷部委員・橋本委員・
萩原委員・戸澤委員・伊藤委員・大澤委員・北邑委員・田中(雅)委員

職員 山崎公民館課長兼本多公民館長・秋元恋ヶ窪公民館長・加藤光公民館館
長・豊泉もとまち公民館長・本望並木公民館長・齋藤本多公民館事業係
長・木場主任

1 連絡事項

(1) 配布資料確認

(2) 第10回定例会要点記録⇒5月中に発送するので、6月10日までに確認し、変更等がある場合は連絡をいただきたい。

2 報告事項

(1) 平成28年第4回国分寺市教育委員会定例会について

事務局：議案を2点提出し審議いただいた。

「欠員補充に伴う国分寺市公民館運営サポート会議委員の委嘱について」資料2に基づき報告。

「国分寺市立公民館保育室運営規定の廃止について」資料3，資料4，資料5に基づき報告。

社会教育関係としては、①平成28年1月から図書館にボランティア制度を導入。平成27年度は19人が登録し活動を始めた。②国立駅高架下の活用について、国立市と協定を締結するにあたり、図書館としてはリクエスト本の受渡し場所として活用する検討をしている。

委員：図書館ボランティアの活動の内容は。

事務局：書架の整理，資料の棚戻し，本のアルコールクリーニング。また映画会やおはなし会などの主催事業の補助などを検討している。レファレンスについて必要なレファレンスツールのリスト化を考えている。

3 協議事項

(1) 諮問について

委員長：資料1を参考にフリー討論を行う。答申作成に向け、今まで国分寺市の公民館がどういう活動を行ってきたか、各館からいろいろな事例を報告してもらった。国分寺市の公民館活動は地域づくりに関わっている。答申作成は、関心領域ごとに3～4人のグループで討論をしていきたい。関わってきた活動や出身の公民館について執筆していただく。どんな活動がクローズアップされ地域づくりに必要な活動と思えたか感想をお願いします。

委員：会社を定年し農業体験講座に参加するまで、公民館の建物は近くにあるが存在は遠いものだった。この1年で、公民館はなかなか良い所で、使わない人はもったいないと感じている。東京都公民館連絡協議会研修の板橋区の話と平塚市の管外研修で、「公民館というのは地域のニーズを探すきっかけづくりに役立つところ」という点が印象に残っている。それを実践するには単独では難しく、連携が大切。地域づくりとは、住みやすいまちづくりであり、挨拶をする人がひとりでもできるということ。答申は誰に読んでもらう答申なのか。行政に出して反映されるような答申か、公民館グループの高齢化などの課題へ向けたきっかけづくりとしての答申なのか。

委員：テーマが漠然と広域的が絞れない。公民館をいかに使い地域とつながっていくか。公民館を軸に若い世代と高齢者をつなげられるようになればいいと思う。女性は保育室などで公民館活動に参加することはあるが、男性は仕事が定年になり、仕事とは別のことをしたいと思ってから公民館に来る。いかにして公民館に向かわせるか。若い世代の人は仕事をしていると公民館を使えない。公民館に子どもを連れてきて、子どもを預かってもらえれば地域づくりに関われる。答申は、市民に対しての答申としたらいい。いかに地域に向けて、情報を流していくかが大切。市民に流すのは難しい。

委員長：公民館だより「けやきの樹」などを使い、概要版をつくる方法もある。

委員：今までの保育室は、グループ活動や長期の講座でないと預かるものではないといわれてきた。最近は短期で預かるようになった。

委員長：グループだけでなく、個人にも門戸を開くということか。

事務局：保育室事業は連続講座に対し保育を行っている。今までは1回だけの講演会や講座に保育はつけていなかった。保育も大切であるが、親が学ぶことも大切だと考え、託児に取り組むことにした。連続5回以上の講座は保育、4回までの講座は託児と整理した。平成26年度から恋ヶ窪公民館で託児を行い試行した。

委員：施設を子どもがいる人たちに使ってもらい増やしていかないと。

委員：関東甲信越静公民館研究大会に参加し専門的な言葉がわかった。これからの公民館を考えていく時に、「持続可能なまちづくり」として、公民館でまともまれるのではないかと思う。公民館は、大人になってからも勉強できる場所。どんな社会を目指していくのか皆で話し合い解決していく必要がある。答申は市民に向けて発信するべきものだと思う。

委員：講座に保育のない頃から、膝に子どもを抱いて参加し、公民館活動が始まった。保育室活動は親も子どもも育つ場として大事にしながらも、保育室活動が変わってきた所を評価する。保育室活動の回数が減り24回が今は13回。他の事業を展開し、いろいろな市民の意見を聞く中で、公民館としてどういう事業をしていくか、その視点を忘れずに取り組んでいければいい。地域づくりとは、人と人をどうつなげていくかを重点に学習する場であり、考えながらものごとを解決していくこと。最終的には個の自己実現をしていくことが得られたら幸せだと思う。自分は公民館活動で人とのつながり

ができた。答申は、職員に期待することも盛り込み、市民にできることも盛り込み、行政と市民に向けて出したい。地域福祉計画の話聞き、公民館が地域では第一だと思った。いろいろな部署の中で、公民館は大きな柱なので、市民の身近な場所として地域づくりに取り組んでいけると思う。

委員：道の駅を木更津で作るなど、行政と関わる案件をしている。公民館運営審議会に参加し、どこの行政もしたいこと、困っていることは同じなのだと思う。実際、防災拠点や地域内外の交流ができる施設、地域振興という題目が入る。公民館も図書館もNPOが運営するなどいろいろあるが、地域づくりの拠点として求められていることはボーダーレス化してきている。国分寺市の公民館が、それぞれ5館が別々に取り組み、地区館としてこんなにも違いがあるのかと。地域を国分寺市ひとつで考えるのではなく、より細かく身近な公民館で活動をしてきたことがわかった。公民館活動が可視化できていないため、一部の人しか利益を得ていないと思われることも感じた。今まで活動してきた方々が大切にしてきたから、今、公民館がある。答申は、職員の方、全市民に向けて必要だが、未来の市民に向けて、数十年先の国分寺市民にどのような形で公民館を使えるのかということ、全国に向けて発信していく答申になればいい。そのために、今、公民館をどう開いていくのか。特に全国に保育託児付きの講座が広がってきているので、評価していくことが必要。今まで公民館を利用してきた人たちの活力を活かし、幼老複合施設とか。公民館は地域の学びの施設であるので、全世代に開かれた基本理念にあわせ、現状をかえていくような答申ができるかと思う。

委員：自分の公民館での活動をベースに話すと、10数年グループ活動をしてきた。その時から国分寺市の公民館は結構いろいろしている。いろいろな視点から、今、国分寺市の公民館は地域に根ざした活動をしている。ただ特定の人しか使っていないことが残念であり、公民館を伝えていくことが課題だと思う。「地域づくりとは何だろう」といういい講座をしているのに、参加者が少なかった話を聞き、市民に面白さを伝えていくことが大事だと思う。地域づくりが大切、人と人とのつながりをといても、自分が楽しく、成長できなければ参加しない。講座はあるのだから、それをどう自己実現と地域づくりが両立できるようにするか、どう伝えていくかが大切だと感じた。カルチャーセンターなど大人になって学べる所は増えた。いろいろな講座ができ、保育や託児付の講座もできてきた。たくさん講座がある中で、公民館を選んでもらうための講座をしていかなければならない。

委員：社会福祉協議会は地域の特性に応じて、地域活動を行っている。国分寺市では、さらに小さな地域の特性を活かすために、それぞれの地域に分けて小地域福祉活動に取り組んでいるがまだまだ足りないと思っている。取り組みは地域の市民の皆さんと一緒にしていくことが求められている。ただ自分の住んでいる所の公民館がどんな事業をしているのか知らない。今、公民館で取り組んでいることを知っていたら変われるのではと思う。私が

入職した頃、国分寺市の公民館は都内でも進んだ公民館だと言われていた。今の公民館の活動を見ても他市の公民館に引けを取らないが、公民館を知らせることは難しい。どういった方法で発信していくのが大切。答申はわかりやすいものが良い。3月に早稲田実業で開いたシンポジウムで、ある中学生が公民館を取り上げた。公民館に良くないイメージを持っている人もいる。それは公民館を知らないからであって、難しい答申では読んでもらえない。これからの世代に読んでもらえるようにするには、概要版もだが、漫画であるとか、中学生や高校生に投げかける機会が必要だと思う。

委員：ひとつは、人というソフト分野中心の地域づくりを考えた。私は地域開発・都市計画などハード部分が専門分野。都市計画もハードからソフトへ変換してきた。国分寺市の地域は、雑木林とか生物があり、それに人々がどう関わっていくのか。農業に焦点を当てれば、地場産業とか地産地消とか。どのようなことで都市計画に市民が関わっていくのか、観光をどうするのか、そこに人のネットワークがどう絡んでくるのか、公民館がどのように考えていけるのか。一般行政は縦割りだが、地域づくりには横割りが必要。教育委員会や公民館であれば全ての一般行政を平等につなぐことができる。「持続可能なまちづくり」をハードとして横割りでする必要がある。総合的に考えることができるのは公民館。職員と市民がどうつながるかも大事。2点目としては、松下圭一先生の「社会教育不要論」に対し、社会教育の職員が中心になって、市民をコーディネートして、ものすごい社会教育をした。初めて当時の社会教育主事の人に話を聞いて、驚くばかりの活動をしている。武蔵野市の社会教育は、その学びを受けた人が、コミュニティセンターとか地域づくりに入っていく、今の市民活動の学びをつくっていた。今の国分寺市は正規職員が位置づいていて、市民と一緒に学びをつくり、公民館の学習をつくっている。公民館は市民と協働の最前線で、協働のモデルもつくることのできることを、国分寺市の公民館の意義かと思う。3番目は、託児という言葉が新鮮だった。私は、小平市でも公民館運営審議会の委員をしているが、今までは小平市も国分寺市と同様に長期に学ぶ講座が中心だった。ある館がモデル館になって単発の講座を行い、その効果がどうなるかを試している。公民館の講座も長期から短期へ移行する必要がある。短期に変えることによって参加者が増えるのではないか。長くじっくり学ぶ講座から、短期に気軽に学ぶ講座へ変えていくことを公民館が試している。長期に学んだ方が、短期に学んだ人を巻き込んでいくということもできる。長期から短期への過渡期でそれが求められている。最後は答申の相手だが、市長・一般行政職員だと思う。普通、公民館では館長から諮問を受けて、館長へ答申をするというのが通常。今までは内部的なもので公民館をいかに良くしていくかというものだったが、今回の答申は地域づくりのための基盤づくりを公民館がどうしてきたのか、公民館を見せるための答申。公民館が生き残るためにどう見せるか。データ化して訴えていくということが大事だと思う。方向性の前に実績を見せる必要

がある。以前、本多公民館の公民館運営審議会の委員をしていた頃に、自主グループがいかに関わり役に立っているのか、地域づくりに関係しているかということの調査をした。公民館運営サポート会議を活用しながら、各地域にどう根ざしているかをデータ化することができると思う。説得材料にできればと思う。

委員長：具体的に4点提案をいただいた。市長から子どもまでに、わかる答申しなければいけないということ。

委員：ハード面についてと、職員と市民についても話し合っていかなければいけない。保育・託児付で若い世代の方が勉強し、自主グループになり、あるいは子どもが小学校に入ってPTAの役員をする。すごいネットワークだと地域的には思う。子育てが終わると自治会役員になり、あるいは民生・児童委員になり、あるいは老人会の役員を担い、地域に還元していく。そういうルールがあり、公民館はすばらしいことをしている。もとまち公民館には地域会議があるが、それぞれの館で形は違うかもしれないが、いろいろな情報を集めながらお互いに課題を共有して解決していこうという要素が公民館にはある。地域づくりの要になるということがわかる。社会福祉協議会と公民館のつながりは薄くまだまだ足りないと思う。強固にする必要があると感じている。元々公民館は市民と行政が作り上げてきた歴史があり、公民館を大事にしようという気持ちが地域にあると感じている。だから講座を終えて新しいグループができていく。どのように答申を書いていくか。地域づくりの基盤があることをどう表現するのか。より一層国分寺市の公民館を見せる必要性があると思う。全国へ国分寺市の公民館はこういう公民館だと言いたい、やはり最初は行政だと思う。館長をはじめこの運営方法をとってきた努力と、市民の協力をもっとアピールして、もっと事業運営に予算がほしいというのが希望。市長と行政へ発信したい。

委員長：1年間を通して話を伺えば伺うほど、公民館イコール地域づくりということがわかる。例えばシニアのパソコン教室の事例で、中学生が中学校で教えていて、地域づくりに関係ないかと思われるが、国分寺市の場合はまさにそれが世代間の交流になり、中学生も育つし、大人にとってもいいコミュニケーションの場になる。人と出会う人づくりをテーマとして掲げていなくても、皆、展開されている。すべての事業が地域づくりだと思う。豊かな公民館実践を、地域づくりという表現でどう見せていくのか、その作業に知恵を出していくことになる。

委員長：他の地域からの目で第三者的に観察して感じたことがいろいろあるが、ひとつは埼玉などで起きているコミュニティ施策や福祉センター施策を市長が優先し、公民館を防災拠点としコミセン化が広がっていること。学習をしていくことが、公共的な意味合いではなく、趣味的なことはカルチャーセンターに行けばいいという位置づけである。公民館事業をわかっている市民と、その他大勢の公民館を利用したことのない市民とが、同じレベルで考えられている。残念ながら埼玉の鶴ヶ島など公民館最先端という町

でも何千という署名が功をなさなかった。市長サイドの行革プラス公共施策としての福祉的な市民参加と、公民館の自己実現。国分寺市の公民館が、自己実現、人間発達をとげながら、それがまちづくりにつながっているということを、いかにうまく伝えていくかが必要。もうひとつ価値があると思ったことは、地域会議と国障連の活動。この地域会議の実践を10年ぐらい前に東京都公民館研究大会の報告で見て驚いた。東京の中野区や川崎市で、地域ぐるみの子育ての地域教育会議が地域の高齢化などで担い手がすくなく弱体化してきている。国分寺市がなぜこの地域会議を続けていられるのかを掘り下げて答申の中に盛り込みたい。通常、多摩地域は、自立した市民が教養的・趣味的に公民館を利用しているというイメージが一般的には強いが、中に立ち入ってみると、地域会議のような丁寧な日常の話し合いをいろいろ積み重ねていて、民生・児童委員や児童館などと話している。形骸化や新しい活動が芽生えないマンネリ化が他地域では多いが、国分寺市はなんで当たり前のように続けていけるのか。非常に価値のあること。館の中で自己完結する事業ではなく、地域でいろいろな役割を果たしている団体や個人が定期的に情報を共有できる場として、公民館が場所を提供している。コーディネート役やつなぎ役は都市型公民館ではあまりない形である。きちっと評価して、なぜそれが実りある活動なのかを書いていただきたい。国障連の喫茶室のことも、長い歴史があって持続性に感銘を受けた。地域会議で最先端だった川崎市から、公民館カフェについての講師を依頼され調べたところ、国立市と国分寺市が公民館カフェの先端をいっている。障害者の支援とボランティアの人たちとの共生の育ち合いだと思う。一方、社会から孤立し阻害されている人たちの居場所論とか、お茶の間ロビー論があり、公民館のロビーは大事だといわれている。国障連が喫茶室を運営していることから、ロビーコンサートとかに広がっていき、公民館に喫茶室がある意味は大きい。お互いが助け合う理念があってカフェがある。都市型の公民館では国立市、国分寺市は最先端をいっている。通常、喫茶店を置くということは業者委託になるか、一切飲食禁止という公民館が多く、田舎に行くと飲食のできる公民館がある。なぜ都会の公民館はお茶が飲めないのか。だれもがふらっと来て立ち寄ってお茶を飲んで帰るという来かたでもいいではないかという、国障連の深い運動的なボランティア的な精神があって運営されている。地域会議と公民館喫茶室を国分寺市の公民館が今まで持っていたイメージと違う公民館の実績として位置づけていきたい。また強調していきたいことに、農業体験講座とか、以前「農のあるまちづくり」をやってきたことがある。以外に多摩地域は農業地帯と隣接しながら住民が暮らしていける幸せなまちで、歴史的に公民館の事業に取り入れていて、環境の意識であったり子どもの自然体験の活動であったり、環境保全を公民館が意識的に取り組んできた。様々な形で子どもたちからお年寄りまでが、親しめる自然、身近な自然として大事にしてきているという、小さな地域で多様な形で自然との共生が公民館

事業として追求されてきているということ盛り込んでいきたい。高度な講座と、入門的な門戸の広い講座と、他地域を含めて歩くような講座などを、定着させるためにどうするか。防災講座などを材料に、深めて書き込んでいきたい。市長から中学生までにわかるような答申を書くのは、皆さんの腕にかかっているので、思いを込めて書いていただきたい。今後の進め方について事務局から意見はあるか。

事務局：特にはありません。今年度末までに答申いただくことになっている。その間、臨時の会議やワーキンググループが決まれば資料を用意していく。公民館運営サポート会議に話すことがあれば、各館の館長と委員とで協力して進めていきたい。

委員長：国分寺市でひとつの公民館運営審議会になって最初の答申になる。公民館運営サポート会議に公民館運営審議会がどうフィードバックしていくか、答申に取り組む必要がある。例えひとつの考え方を出したからといって、国分寺市ではそれに強制される中央的な公民館運営をしてきていないはず。それぞれの館が地域づくりをこういうふうにしていきたいという実績があり、課題はこうと出してもらい、それを各館のコメントとして答申にいれていくようにしたい。公民館運営審議会の委員に公民館運営サポート会議の委員が意見を出すとか、アンケートにすると。いずれにしても国分寺市の地域づくりを目指す公民館はこうですと、この場だけで書くのではなく、5館の意見を組み込んだ答申にしていきたい。それでなくては地域づくりとは言えないのではないかと思う。プロセスは大変だが、フィードバックの時間をとっていきたい。本格的に理想的にまとめていかないと、理念をまとめていくのは難しい。議論になるような全体の答申のまとめ方について、第2段階として次回議論していただく。公民館といくつかの柱立ての提案をさせていただいて、テーマごとに小グループを作ってもらえたらどうか。議論を深めていく提案をしていただきたい。

委員：柱立ては大変だと思うが、皆さんの意見を網羅していききたいと思う。入れすぎて焦点がぼけてしまうといけないので。

委員長：高齢者の参加をどう促すかというような答申であれば作りやすいが、地域づくりというとなかなか難しい。公民館活動は全てが地域づくりにつながるような活動であるから、国分寺市の公民館のあり方を議論するに等しい。今、地域づくりというからには、限定的な意味づけをしていかないと答申として漠然としてしまう。ハードの部分を見えるようにし、地域で人が育つというところで保育室や国障連の動きを束ねていく。4つぐらいの柱を合計すると、国分寺市の公民館が目指す地域づくりといえるかと思う。子どもの言葉でもわかるように、中学生に関わってくれている方や大学生のボランティアの方に、一言メッセージを書いてもらい、メッセージ集をつけるとか、コラム欄を散りばめてわかりやすいコラム集を別冊でつけるとか、わかりやすくしていく。基本筋をきちっと入れたものと、それ以外の声を入れていくことを工夫する。保育室からPTAにというコラムがあっても

いい。市長・行政への答申は、役立つ人間や市民が公民館から育っていることを証明することだと思う。予算はかかっているが、その分役立っている人がたくさん育っているというようなわかりやすい証明をしたい。コラムで中学生やお母さんの声が出るといいと思うので、こういう人に出してもらうのはどうかというような提案をしてもらいたい。複合的な答申ができたらと思う。

委員：基本構想をつくってもらい、それをたたき台に議論を深めていく。雑駁とした考え方しかできないので、まず提案していただきたい。市長・行政には活字で良いと思うが、もう少し対象を広げた場合、ビジュアルがいいのか別冊がいいのか、その冊子の中のコラムがいいのかメッセージ集がいいのか、事例を出してもらいたい。

委員長：情報発信の仕方について、写真を入れるとか一言で伝わるようなレイアウトやスタイルを5つの館から出してもらい、ひとつずつ中学生や若いお母さんに読んでもらえるような形でまとめる工夫が必要。市長・行政にはきちっとしたものを渡さなければいけないので、財政課なども読むようなものを出していきたい。声を出す部分を工夫して今までの答申にプラスしていく。

委員：ハード面とか未来に向けてという視点を考えると、公民館の立地は小中学校に近い。地域会議がどうして続いているのかという点では、本多の地域会議は子どもの団体を中心に、もちろん高齢者の団体も来ている。子どもの団体は、学校の先生など年々メンバーが変わるので、活性化していく。どう学校とつながっていくか。以前、本多公民館が全面改築の時に二中の調理室を借りたことがあり、その時は二中の調理室が改築したばかりで、公民館運営審議会に校長先生がいた。公民館は土曜日に二中の調理室を借りて事業をした。学校施設をコミュニティが使うということの実践。今後公民館の利用団体が多くて実習室が使えない時には、また二中の調理室を借りるなど、ハード面として入れてもらえると良い。

委員長：地域会議を、当たり前ではなく本当に大事なことだと深く掘り下げて書いてほしい。地域会議だけを書くのではなく、テーマ化して他のいくつかの実践とあわせて書いていくと、小グループのイメージになる。

委員：これからも公民館を盛りたてていくには、公民館職員の果たす役割が大きい。公民館の現在の人事は一年くらいで異動してしまう。じっくりとその地域を知っていただいたほうが良いと思うので、答申に載せられないか。

委員長：皆さんが載せたければ盛り込まれる。田中委員の意見の中にも職員との協働ということがあった。ただ、行政サイドとして見た時に、小さい建物にどういう人数がいるのかというのは見えにくいのが公民館。公民館の職員が忙しくて足りない実態の中で、住民と一緒に活動している姿を描き出さないと、1館2～3人でいいのではないかという話になる。人数配置は住民のほうがわかっているので、説得できるように書かないといけない。

委員：職員が長くいるというのは一方で良くないこと。同じ所に長くいると職員

のためにもならない。民間会社でも3年、長くても5年ぐらいで動く。国分寺市の中のことを公民館だけでなく知り、いろいろなところを経験してきている職員が必要。公民館しか知らないと、何かしようしても他部署とのつながりがないからできない。職員が異動しても公民館が動くためのシステムづくりをしていくべき。マニュアルを作り、職員が異動してもいいようにしていけばいい。職員が変わってしまうと公民館が変わってしまうようなことになってはならない。公民館運営サポート会議がそのためにある。目的はそこだと思っている。

委員：行政はいろいろな情報を持っている。そしていろいろなサービスがある。そのサービスを使わないのであればいいが、必要になった時に何がどこにあるのかわからない。それほど行政には情報量が豊富であり、人も知識もある。行政職員もサラリーマンだから異動もする。私たちだっていずれ年を取って辞めるかもしれない。次の世代をつなぐのが学校の生徒たち。地域の団体や公民館の活動グループの人たちにつないでいく役割を担わなければいけない。それが公民館運営サポート会議の委員であり、公民館運営審議会の委員である。公民館運営サポート会議の意義はそこにある。

委員：公民館の利用が減っているのではないか。高齢化によってグループが減っている気がする。努力しても人を増やせない。その辺から考えていかないといけない。公民館まつりの出品作品が減り、寂しくなっている。地域とつなげ盛り返すことをいわないと駄目になってしまうのではないか。10年活動しているが、新しいメンバーや新人が増えていかない。新人が入れるシステムをつくっていかないといけない。そこを考えていかないと公民館自体も衰退してしまい、いらぬといわれてしまう。

委員長：実態を把握するには、グループにアンケートを取ったりしないと出てこない。公民館運営サポート会議から聞き取りをしてほしい。

事務局：部屋の利用率は下がっている。グループ数、利用人数は変わらない。新しいグループができていくが、古い活動40年のグループなどが解散していく。新人が入るようにするために「グループ公開事業」をしている。

委員長：この答申は、公民館を若い人たちの未来につなげ持続していけるようなものとしていきたい。次回までに素案のたたき台を作るので徹底的に議論していただきたい。

4 その他

(1) 教育委員との懇談会の日程について

10月27日午前11時から決定。

(2) 東京都公民館連絡協議会について

総会が4月20日に開催され会長市を無事引継ぎ終えることができた。

委員長：次回の内容は、今回までの協議に基づき体系や素案のたたき台をもとに協議して行きたいと思う。以上で本日は終了する。